Real Game 第1章 ~修一編~

猫桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Real Game 第1章 〱修一編〱

【Nコード】

N56490

【作者名】

猫桜

【あらすじ】

Real Game本戦開幕！

現在の時刻は0時01分……

先日、サングラスをかけたスーツ姿の男からAPという装置を手渡された。

腕につける携帯のような物で、3人は「便利だ!」と迷うことなく装着した。しかし、一度つけたら二度と取り外す事ができないと事後報告されたため、3人は落胆しながらも「まあ…いっかあ」と適当に納得したのであった。

APの機能、使い方はここ数日ではほぼ完璧に扱えるようになっている3人である。

少々気になる機能も多々あるのだが、なるべく気にしないようにしているのだった。

ピピッピピッピッー!!

再びAPからアラーム音が鳴る。

3人は目だけで会話を済ませ、再びメール画面を開く。

.....

新着メッセージあり

件名：クエスト

本文：9月12日までにプレイヤーを1人殺せ。

注意 それまでに達成できなかった場合は『失格者』扱いとなる。

- - - - -

「なっ！」

「ええ！！！」

「んなあほな！！！！！」

3人は尋常ではないこのメッセージの重大さに気付く。

「修……」

「なんて無茶苦茶な……」

「人殺し……か……」

3人はため息を吐きながら、なにか決意をした目で真っ直ぐと前を見る。

「やるしかないやろ！」

「修……」

「修一に任せる！やりたくはないが…しゃーないやる…」

3人にとって『失格者』という単語は強烈なトラウマとなっているため、しづしづこの『クエスト』を受け入れる……

9月7日〜その2〜

運転席には太志、助手席には修一、後部座席には真琴が乗っている。

修一はAPのリーダーを見ながら太志に場所の指示をしている。

真琴は眠たい目を擦りながらウトウトとしている。

嫌な事は先にしてしまえ！

という3人の考えが一致。急いでるわけではないのだが、たまたまリーダーの南西の方角に3個の緑の点が表示されているのを確認。

早速、3人はとりあえずその点に向かって車を走らせているのだっ
た。

6

「人殺しに向かってるなんてな……」

「気は絶対にのらんわな……」

「修……ねむい……」

「アホマコ！おきとけやあ！」

APに表示されている時刻は01時36分。

外はかなり暗く、街頭や民家の明かりなど一切ない。ヘッドライトの光だけが夜道を照らしている。

かなり不気味な光景である事に間違いはないのだ。

「ハンターやと思えばちつとは気が紛れそうやな？」

「そう簡単に割り切れるもんなら…気楽やねんけどなあ？」

「修…ねむい」

「おきとけや！…！！」

真琴は今にも寝そうな顔で目かなりシヨボシヨボになっている。

「ちつと寝てからいくのも俺はありやと思っが？」

「いや…相手もおそろくワシらに気付いてるはずや…待っててくれるわけがないやろ？」

「…」
「そうやな…ちつとでも近づいてマピールしとくのも手やるっしな」

「修…ねむい」

徐々に真琴の声が小さくなってきている事から、真琴が寝るのも時間の問題…

そんな中修一たちはひたすら目標へ向かって車を走らせているのであった。

9月7日

- - - - -

真中 美香 (まなか みか)

性別：女

年齢： 21

職業：強盗

身長：165 cm

体重： 50 kg

力：C 頭脳：A

魅力：S 潜在力： B

ランキング：1258150000中>53位

称号：プロの犯行

戦闘値：103+1000 (1103)

スキル：探知不可 掏摸 究極開花傾向あり

武器：白刃 白河 美月オリジナル武器

- - - - -

「待ちやがれクソ女！！！」

「盗まれる方が悪いんだ！」

男3人に女が1人追われている。

女の手には一本の白い棒が握られており、明らかに男たちから盗んだ物であると主張をしてるようだ。

美しい黒の長い髪を靡かせながら、女（真中 美香、以後、美香）は颯爽と走っている。

男の足でも追いつくことが不可能なそのスピードはおそらく陸上選手顔負けの脚力だ。

美香の職業上、走るという行為は日常茶飯事であるため、日常的に走る事に対するスタミナや精神力はズバ抜けていると思える。

Real Gameが始まる前も美香は銀行や通行人、果ては自衛隊などから多額のお金や物品を盗み出すほどの盗みの技術があり、やはり一般人の物品を盗む事は朝飯前であると彼女の表情から読み取れる。

おかやま
岡山 桃次郎
とうじろう

性別：男

年齢：29

職業：舞台役者

身長：179cm

体重：68kg

力：B 頭脳：SS

魅力：B 潜在力：B

ランキング：125815000中>7位

称号：破壊するもの

戦闘値：52+52+52+52 (208)

スキル：強制頭脳戦 鮮血

武器：戌（小太刀）雉（短刀）申（脇差） 岡山 桃次郎オリジナ
ル武器。

佐渡 さど
金乃介 きんのすけ

性別：男

年齢：27

職業：舞台役者

身長：190cm

体重：87kg

力：SS 頭脳：C

魅力：C 潜在力：B

ランキング：125815000中>28位

称号：豪傑

戦闘値：158

スキル：回避無効

浦山 うらやま
島三郎 しまさぶろう

性別：男

年齢：31

職業：舞台役者

身長：175cm

体重：63kg

力：A 頭脳：B

魅力：SS 潜在力：C

ランキング：125815000中>19位

称号：太公望

戦闘値：127

スキル：一本釣り

一瞬の隙を突かれた。

金（佐渡 金乃介）と島（浦山 島二郎）が寝ている間、俺（岡山

桃次郎）が見張りをしていたのだが、暗闇に既に女が潜んでいるとは思わなかった……

このAPのレーダーに探知されないプレイヤーがいるとは想定外だった……

先日、ある女にもらった『白刃』という刀をまんまとあの女に盗まれてしまうとは……

あの刀にはなにか特別な力がある……

ハンターと何度か戦をしてみてもそれが判明した。

あの刀の力はあらゆる攻撃をあの一本の刀で受け止める事ができる

……

マシンガンによる乱射の弾丸も全て受け止めるほどの強力な守りの刀。

是非とも俺の武器として持っておきたいと思った矢先の事だった……

「待ちやがれクソ女！！！」

金が先陣をきって走っていく、その後に俺、最後尾に島。

「島！釣りはいけるか？」

「なんだ……やってもいいのか？」

「ああ…問題ない…」

島のスキル、一本釣り。

あのスキルは対象を釣竿で宙吊りにできる。おそらく重さは0になるらしく、100キロ以上はあるハンターも軽々と片手で吊り上げるほど強力だ。おそらく、種別としては『捕獲用』とでもなるのだろうか……

島が釣竿を構え真っ直ぐにあの女目掛けて竿を振る。

まるで追尾機能でもついているかのように島の釣り針が女目掛けて飛んでいく……

9月7日〜その2

「はっ！離せよ！」

島三郎の釣り竿の先には美香が釣られている。

およそ5メートルほど上空で宙吊り状態になっている美香。

「俺は別にお前を殺す気はない…盗んだ物を返して欲しいだけだ」
美香が聞き取れるように桃次郎はゆっくりと落ち着いた口調で語りかける。

「獲ったら獲った人の物って相場が決まってるんだ！キミは3本も刀持ってるじゃないか！1本くらい美香にくれたっていいじゃないか！」

とんでもない美香の言い分に桃次郎は首を傾げながら尚も諭すように言葉を添える。

「そもそも盗むという行為自体がよくない…どうやらこのお嬢さんは荒んだ生活をしてきたらしいな？」

桃次郎は目だけで金乃介に合図を送る。

「へっへっへっ…そんなじゃじゃ馬なオネーチャンは俺様が直々に教育してやらねえとなあ？」

金乃介は舌舐めずりをしながらゆっくりと美香の方へ近づいていく。確かに教育という言葉が発したのだが、金乃介の片手には巨大な金槌が握られている。

「俺様は若くてキレイなオネーちゃんをペチャンコにするのが大好きでなあ？」

愛し惜しそくに金槌を見ながらまるで独り言のように金乃介は話を続ける。

「はあ…また始まったか…」

島三郎は呆れたような顔をしながら少し遠くから煙草を吹かしている。

攻撃はしなくて良いと桃次郎に言われたため、島三郎は美香を吊り上げたままで固定しているのだ。

(何度みてもあれは気分が良くない……)

まるで人事のように島三郎は腰から下げていた酒瓶に手を伸ばし、1人で酒を飲み始める。

「もう一度言おう。その白い刀を返してはくれないか？」

「一度獲った物を返すなんて…美香のプライドが許さないんだよ！」

「そうか……では仕方がないな？」

「へっへっへ……おい！島！このネーチャンをもっ少し下に降ろせよお」

島三郎は金乃介の言葉を聞き、ゆっくりと糸を垂らしていく。

地面に美香の足が着いたのを確認し、島三郎は再び酒に手を伸ばす。

金槌を肩に掛け、金乃介はマジマジと美香の容姿を嘗め回すように眺める。

「こりゃ……中々の上玉だなあ？おい！桃よ？こいつ殺す前に一発やってもいいのか？」

「好きにすればいい……その女の生殺与奪は金に一任する」

「さすが、桃！話がわかるなあ……へっへっへ……そういう事だ……ネーチャン！楽しもうぜえ」

金乃介は美香が抵抗しないように片手で美香の両手首を掴み、反対の手をズボンへと……

突如！

疾風の如きスピードで何者かが金乃介に体当たりをかます！

「女性に乱暴しちゃ…いかんよ？」

スーツ姿の若めの男性。瞬時に美香が拘束されている糸を切り落とす。

「お姉さん！危なかったな？早く逃げろ！」

「誰か知らんけど一応お礼は言っとくわ〜」

予想外の助け舟に美香は啞然としていたが、すぐに状況を理解し、その場から走り去る！

「だっ誰だてめえ〜！！！」

金乃介は怒りを露にさせ、スーツ姿の男性を睨みつける！

「俺は野村太志っちゅーもんです！よろしく！」

「てってめえの名前なんてどうでもいいんだよ！！！！！」

金乃介は顔を真っ赤にさせながら太志と名乗った男性に襲い掛かった！

9月7日〜その3〜

「待て！金！」

「なっ何故止める！桃！」

今にも金槌を振り下ろそうとしている金乃介に、桃次郎は愛刀『申』を向ける。

それ以上はやめておけ……まるでそう言っているかのようにとてつもない威圧感が刀から放たれている。

「確か金の力はSSだったな？それを吹き飛ばすこの男……少なくとも見てもS以上の力だと予想できるな？」

「それがなんなんだ！！！」

「ぶつかればどちらも無事じゃ済まないだろう？」

「チツ……………」

金乃介は桃次郎の言葉を冷静に受け止め、武器を降ろす。

「桃…そいつは今スキルを使っているようだ……………」

「だろうな……………こんな華奢な体付きで金を吹き飛ばせる訳がない……………」

「それに金？」

「なんだよお！」

「相手は1人じゃないぞ？」

「なに！？」

金乃介はすかさず自分のAPのレーダーを見る。

すぐ近くに赤い点が合計3個並んでいるのを確認する。

「てめえ！！もしかしてさっき映ってた3人のうちの1人か！？」

「そうなるだろうな？」

「金！こいつの相手は俺がやる…お前は他の2人を片付けろ！」

「チツ……わかったよ！おら！！もうバレてんだぞ？出て来いやあ！！！！！！！！」

金乃介の怒鳴り声とともに、建物の裏から男と女が1人ずつゆつくりと現れる。

「お？女がいやがるな……こいつは俺様がグチャグチャにするからな？桃よ？」

「いいだろう！許可する！」

「金…そっちの男もお前がやるのか？」

遠くで酒を飲んでいた島三郎がいつもまにか金乃介の背後まで近づいてきていた。

「野郎はお前がやれ！俺様はこの女と楽しむ事にするからよ！？」

「島…面倒だろうが、戦闘命令だ」

「了解……これより戦闘を開始する」

桃次郎は太志と名乗った男。

金乃介はその仲間と思われる女。

島三郎はその仲間と思われる男にそれぞれターゲットを絞った。

「太志？さっき襲われてた女はどこいったん？」

「それがなあ、修一…助けたら走って逃げていったわ……」

「太志君！まじエライよお！ちょっとかつこよかつたかも！」

「真琴ちゃんありがとなっ！」

仲間の男の方は修一、女のほうは真琴という名前らしい。

一行はひたすら桃次郎ら3人がいる場所へ車を走らせていたのだっ
た。

遠めで男3人に女が1人襲われていると確認できた太志はすぐさま
スキルを発動。

偶然にも力がSSに変わり、脚力や腕力、スタミナが跳ね上がり金
乃介へ先手を打つことができたのだ。

修一や真琴もそれに続いて加勢する気満々で後を追ったのだが、力
がSSになった太志の足の速さに追いつけるはずもなく、遅れて到
着する事になったのである。

ブツッブツッブー

この場にいる6名、全員のAPアラーム音が同時に鳴る。

- - - - -

新着メッセージ2件

1件目

件名：戦闘開始

本文：総合個人ランキング7位へ挑戦者あり。

2件目

件名：戦闘開始

本文：総合個人ランキング8位へ挑戦者あり。

9月7日〜その4〜

待つてましたといわんばかりに金乃介は金槌を構え、真琴へ向かって走り出す！

それを確認した修一と太志は、真琴をかばうべく各々が行動を開始する！

真琴のすぐ近くにいるのは修一。

修一は金乃介が明らかに真琴を狙っていると読み、すぐに真琴へ言葉をかける！

太志も、さきほどのやり取りは粗方聞いていたようで、金乃介の標的は真琴であるとすぐに勘付く。

少し距離があるが、真琴のいる位置まで走り出す！

突如、真琴のすぐ近くにいる修一の体が宙に舞う。

まるで飛行能力でもあるかのように自然に体が上空へ向かって垂直に移動している…

暗くてよく見えないが、なにか糸のような物が修一の背中あたり

から見える。

「修一！気をつける！それはスキルや！！」

太志は声を大にして修一に言葉をぶつける……

バキッ！！！！

太志の腹部からなにか鈍い音が響く。

強烈な衝撃が横腹を襲う！

いつのまにか太志のすぐ傍まで来ていた桃次郎に、安全靴のような先の固い靴で腹に蹴りをもらった！

「ガハッ！！！」

いくら太志の力が今SSであるとは言え、痛覚はいつもと変わらず痛いものは痛い！

どうやら肋骨のあたりを損傷したらしく、太志の口からは微量の吐血が確認できる。

ガツキーーーーーン!!!!!!

金乃介の金槌が真琴がもっている鉄パイプを叩く音が辺り一体に響き渡る……

「くう……」

金乃介の予想以上の強打でそれを受け止めた真琴はすぐに手首、膝、背中……

受け止める動作を行う体のあらゆる部分に電気のようなものが走る感覚に襲われる！

かなりの苦痛らしく、真琴はおもわず鉄パイプを落としそうになるが……

その真琴の隙を金乃介が見逃すはずもなく更にもう一撃、真琴の頭上から金槌を振り下ろそうとしている！

「あかんで！もうやめてやあ〜！」

真琴は「こりやかなわん」と白旗をあげたかのように、「受け止める」という行為を頭から除外する。

金槌を振り下ろすスピードをそれほど速くもなく、真琴であっても簡単に避けることは可能。

すぐに真琴は、横に飛び、金乃介の攻撃を避けようと身体の体勢を整える！

「へっへっへっ…女の子なのになかなか強いんだなあ？俺様の一撃を受け止めるたあ〜」

変態…そんな言葉そのまま顔に現れている金乃介の表情。

「逃げるなんてだめだぜ？お前は俺様にペチャンコにされなきゃいけねえんだよ！…！！！」

.....

スキル発動

回避不可

.....

「なにこれ…足が動かん…」

真琴の身体に異変が起こる。

金槌を避けようと足を動かしているつもりなのだが、まるで根がついたように地面から足が離れない…

「ほれ！その鉄パイプで受け止めないと頭がザクロみたいになっちゃうぜえ？？」

へらへらと笑いながら金乃介は楽しむように金槌を真琴の頭目掛けて振り下ろした！！

「おい！なんなんだこれ！放せや！！」

突如、身体が宙に浮いた修一はもがくように身体をバタつかせるが一向に高度が下がらない。

「いいだろう…放してやる…」

修一の身体がおよそ上空7メートルのあたりまで到達したのを確認した島三郎は…

釣竿を叩き付けるように地面へ向ける！

9月7日〜その5〜

徐々に腕や足、身体のおちこちから感覚がなくなっていく……

真上からの衝撃にひたすら耐える事しかできない真琴は既に体力の限界を感じ始めていた……

そんな真琴の表情をまるで楽しむかのように金乃介は金槌による攻撃をやめようとはしない。

明らかに真琴が完全に押されているのは二人の状況を見れば一発で理解できる。

太志や修一は他の2人と交戦中のため、真琴の援護にまわろうにもまわれない……

「疲れてきた……」

ボソツ…つと真琴が一言つぶやいたような気がしたが、金槌を受ける音でそんなつぶやきはかき消される。

.....

スキル発動

吸収

先ほどまではかなり疲労を感じさせていた真琴の身体から徐々に力の息吹を感じる。

何発、何十発と打ち込まれる金乃介の攻撃を少しづつ押し返し始める。

金乃介は「ただの悪足掻きだ」と思う他になく、真琴をつぶせるのは時間の問題。

金乃介にとっての至福の時間がもうすぐそこまで来ているかのように、また厭らしい表情を作る。

まるで釘を打つかのようについてまでも金属音が響く中、真琴はちらちらと修一の方を見る。

上空6〜7メートルほどまで『釣られた』修一の身体は、次の瞬間には地面へ気が変わったように落下。

なにやら鈍い音のようなものが聞こえたような気がしたが、金乃介の攻撃による金属音が思いのほか大きく、そんな落下音も聞き取れない。

直後、また修一の身体が宙へ舞い、また上空6〜7メートルほどまで釣られる。

明らかに島三郎の独壇場、修一の命も赤信号が灯っているかのようにかなり危険な状況であることが解る。

つい10分ほど前には「あかん！やめんか！」などと修一の苦痛な叫びが聞こえていたのだが……

今では上空へ釣られる風を切る音、落下したときの衝撃音しか島三郎の耳には届かなくなっている。

「ふう……」

島三郎も少々、疲労を感じていたらしく、修一を釣ったあとすぐに落下はさせず、そのまま固定。

ジャケットの胸ポケットから煙草を取り出し火をつける。

改めて、修一へのダメージを確認する島三郎。

なるほど、両腕両脚、肋骨…目で見える身体の箇所が損傷を受けているのがわかる。

暗くてよくわからないが、修一の表情は苦痛に歪んでいる。呼吸をすることで精一杯であると島三郎は判断している。

「あと5回くらいか…」

まるでめんどくせえ！と言っているかのように、島三郎は眉間にしわをよせながら人差し指で煙草を弾く。

一服が終わったらしく、また修一の身体は気が変わったように地面へ落下する。

9月7日〜頭脳戦〜

気付けば俺は明らかに外の闇ではなく、人工的に作られた『闇』の中にいた。

修一、真琴ちゃんの姿はどこにも見えず、ただ俺の視界を闇が支配している。

ただ俺の目の前にポツンとパソコンの画面のようなものが置いてあり、その下にはコントローラーのようなものが置いてある。

一体なにが起こったのか……俺はあいつ「桃次郎」と戦闘をしていたと思うのだが……

頬をつねっても腕をひっかいても痛覚はない。

なるほど……こりゃ夢か！と自分で納得をしてみようとしても……

明らかに夢なんかじゃない……

身体も自由に動く、頭も起きてる、5感が働く。

現実であって現実ではない空間に移動してきた……そんな感覚だ。

不意に、目の前のパソコンの画面が点灯。薄暗い光に映る真っ赤な文字。

『頭脳戦開始』

一体なんのことなのかわからない。

「どっとなってるんだ…」

不安、興奮…どっちかわからないがそのどっちかの感情が昂ぶって
くる…

「そうか…貴様は頭脳戦が始めてか…」

ついさつき聞いた声が響く。

明らかに桃次郎の声であると頭が働く。

「おい！なんなんだここは！」

不躰な質問を浴びせる。

今の俺には今の言葉で精一杯だからだ……

「まあ…肉弾戦よりもここなら安全だ…完全に俺と1…1の状況な
んだからな？」

答えにもならない桃次郎の言葉。

そういえばAPのメニュー欄に「頭脳戦」があつたことを思い出す。

修一と真琴ちゃんもそれには気付いていた。確かあのときは……

.....

「なんなんこれ……」

「修……なんかこれ危ない気がする……」

「ああ……危ない事はしないのが一番やな」

.....

おいおい……今思えばもうちょっと中身の話をしておくんだ……

なんて行き当たりばつたりなんだ俺たちって……

「では、まったくルールもしらない貴様に勝つても俺はつまらないからな？簡単に説明してやる」

敵であることには変わらないが、今の桃次郎の言葉は俺にとっては助け舟。

（助かった！）

俺は無意識にガッツポーズを作り、桃次郎の次の言葉を待つ体勢を

作った。

- - - - - 頭脳戦

フィールド（対戦者同士の頭の中）で試合を行う。
ルールはじゃんけんと同じ。

グー、チョキ、パーの3個が基本的な攻撃、防御手段である。

グーはチョキに勝ち、チョキはパーに勝ち、パーはグーに勝つ。

互いの持ち点は^{ライフ}3点。

先に0点にしたほうが勝ち。0点になったほうが負け。

負けた相手は命を失う。

じゃんけんて勝利した相手は負けた相手のライフを1点奪う事ができる。

例：

対戦者A > グー（ライフ3点） 対戦者B > チョキ（ライフ3点）

結果。

変動 > 対戦者A（ライフ4点） 変動 > 対戦者B（ライフ2点）

あいこは引き分けとなり、互いにライフ変動は起きない。

対戦者同士で交互にターン制が適応される。

自分のターンにしかできないコマンド、相手のターンにしかできないコマンドが存在する。

貯める：

どちらのターンでも選択が可能。貯めをすることで「貯めポイントが1点加算される」

但し、どちらかがグー、チョキ、パーを選択した場合、無条件で貯めを選択した相手は負け（ライフ1点を奪われる）となる。
貯め同士ならライフ変動は起きない。

回復：

自分のターンのおきのみ選択が可能。パーティーメンバー1人の命を捧げる事により、自分のライフを1点回復することができる。パーティーメンバーの選択はランダム。

クリティカル：

どちらのターンでも選択が可能。貯めポイントが3個集まったときに選択が可能（貯めポイントは最大3個）。相手のライフを最大で5点奪うことができる。

防御：

相手のターンのおきのみ選択が可能。クリティカルを一度だけ防ぐ事ができる。

但し、相手がグー、チョキ、パーのうちのどれかを選択した場合、無条件で防御を選択した相手は負け（ライフ1点を奪われる）となる。

9月7日〜その6〜

（見ず知らずの人に助けられた。）

（いつも1人で自分の事は自分でやってきたし、尻拭いだっていつも自分でやってきた。）

（捕まってもちゃんと逃げ切る自信もあったし、殺し合いになってもなんとかかなりそうな予感はしてた。）

（始めてかもしれない…人から助けられたのって…）

美香は走りながらなにか考え事をしている。

自分を助けてくれたのはたった1人の細身な男。

相手は確か3人。

しかも1人はかなりの筋肉質で、もう1人は得体の知れない不気味な男。もう1人は釣竿で簡単に自分を拘束した男。

逃げてきてからもう10分？15分？それくらいの時間が経つたと美香は頭を働かせる。

（もうあの男は生きてはいないかもしれない…）

なんとも言えないやるせない気持ちが美香を包む。

別に見なくてもいいのだが、なんとなくAPのレーダーの画面を開

いてみる。

(こんなの確認しなくたって…もうわかってるのにや…)

レーダーの画面にはごく近い場所に赤い点が3個、緑の点が3個映っている。

(え？どういこと…?)

美香はその状況がまいち理解できず、思わず足を止める。

明らかに映っている赤い3個の点は先ほど自分を追ってきた男たちであるのはわかる。

だが、他に映っている緑の3個の点がよくわからない。

場所を見れば明らかに戦っていると判断できる。

(さっきの男…今もまだ無事!?)

美香は考えるよりも先に足が動いた……

ずっと走ってきた道を……

反対方向、つまり、元いた場所へ向かって走り出した。

先攻：岡山桃次郎

コマンド選択完了

後攻：野村太志

コマンド選択中

(チツ…あいつが先攻か…こりゃこっちが不利なんだよな…)

太志は画面に映っている文字を見ながら、自分のコマンドをひたすら考えている。

(普通に考えればここは貯め…なんだが…あの方法をやるにはじゃんけんて一回勝たないと…)

勝つ為のリスク…

じゃんけんて勝つ確立は33・33333…%。明らかに5割などいうと生易しい確立ではない。

しかし相手にも同じような事が言えるため本当に運次第。

じゃんけんてまずはなにを出すか、人間の性格や今までのじゃんけんでの勝算。

そんなものが大きく左右される。

太志の脳内ではそんな事を考える暇もなく、ただ自分が思ったとおりにコマンドを入れよう！その1択である。

(よし！まずは様子見やな！)

.....

両者コマンド選択完了。

戦闘結果。

岡山桃次郎：チヨキ（ライフ3）

VS

野村太志：貯める（ライフ3）

変動

岡山桃次郎（ライフ4）

野村太志（ライフ2） 『貯めポイント1』

.....

(あかん…予想外や…)

まずは1点。桃次郎が先取したことにより一気に太志のモチベーションが下がった……

9月9日

秋山 あきやま
美都 みこ

性別：女

年齢：17歳

職業：高校生

身長：159?

体重：43?

力：B 頭脳：A

魅力：S 潜在力：B

ランキング：125815000中>95位

称号：導かれる者

戦闘値：106

スキル：なし

- - - - 白河 美月
しらかわ みつき

性別：女

年齢：18歳

職業：高校生

身長：150？

体重：40？

力：C 頭脳：B

魅力：S 潜在力：測定不能

ランキング：125815000中>35位

称号：対なる者

戦闘値：58

スキル：究極開花傾向あり

- - - - -

太陽は高く上り、まだ残暑が残る暑さの中、同じ制服を着た2人の女子高生が談笑している。

片方は黒髪を一本に束ね、ポニーテールが似合う端正な顔立ち。

しかし、手には年季が入った日本刀を持ち、明らかに戦闘慣れした身なりであることは一見してわかる。

もう片方は、ほとんど白に近い金髪のショートヘア。明らかにギヤルと呼ばれる外見である。

場所は京都、Real Game本戦開始から既に2日ほど経ったこの街も、人々の殺し合いが日常的に起きている。

京都の日本的な素朴な景色も今では道路のあちこちに血の跡や、事切れた人間の死体、ハンターの残骸などで散乱していて、明らかに不快である。

美都と美月も何度かハンターや人間に襲われ、Real Gameという残酷なGameに巻き込まれていると自覚もしている。

当然のように腕にはめられたAPを見ながら、やや余裕を持った表情で談笑を楽しめる事から、もう慣れたと言っても過言でないほどの落ち着きを見せている。

- - - - -

新着メッセージあり

件名：クエストクリア！

本文：クエストクリアおめでとうございます！次回クエストは9月15日でございますので、それまでお待ちくださいませ。

.....

愛想のない文字の羅列を見ながら美都は怒りを露にさせた表情でA Pを睨みつけている。

一方、美月は「別に……」といった表情で足元に転がっている人間の死体を踏みつけている。

「美月……？ やっぱリアンタの武器さ……？」

「どーでもいいよ……あんな武器なくたって私は平気」

「ならいいんだけどね……あの3人組どーなったのかな……」

「さあ……？ 個人的には死んで欲しいけどね？」

「そーだね！ あっはっはっは！」

人を殺すことにもはやなんの抵抗もなくなった美月と美都は平然と恐ろしい言葉を吐くようになった。

だが、スキルを使わない一般的な人間ならば容易く殺害できるほどに2人の実力は高い。

美月は元々『白刃』という刀を武器入手イベントにより獲得していたのだが、ある3人組により武器が奪取され、今ではなんの変哲もないただのバタフライナイフを愛用している。

だが、美月は空手の有段者であり、基本的な戦闘は肉弾戦。つまり体術を主体している。

ナイフの用途は相手への止めに相手の心臓目掛けて振り下ろすだけである。

美都は剣道の有段者ということもあり、実家に飾ってあった日本刀を愛用している。

竹刀と真剣では重みや尺が違うのが、天性とも呼べる美都の剣術の腕でそこはすぐに慣れる事ができた。

毎日の学校生活に飽き飽きしていた2人はこの非現実的なReal Gameの存在にむしろ感謝しているほど生き生きとしている。

毎日のスリルや戦闘での緊張をまるで楽しむかのように……

「今日はどこ行く?」

「どこでもいいよ?美都に任せる」

「うん……」

「なんか…みいはやっぱあの3人組がむかつく!」

「それ私も!殺せるなら殺したいし!」

そんな2人でも、白刃を奪われた時は死を覚悟したのだが……

刀だけが目的だったらしく命までは奪われなかったのだ。

……が、それは2人のプライドに傷をつけ、日に日に例の3人組への殺意に変わっていったのだ。

「もしかしたらこのAPで探せるかも?」

「私こういう機械ちょっと苦手だから…美都に丸投げ」

「おう！任せておきたまえ」

美都はAPを起動させ、プレイヤー検索画面を開いた。

アイテム検索結果

白刃 真中美香 現在所有

プレイヤー情報

真中美香

力：C 頭脳：A

魅力：S 潜在力：B

戦闘値：103+1000

スキル：?? ?? ??

パーティー検索結果

リーダー：阿久津修一

メンバー：新庄真琴 野村太志 真中美香

パーティー評価：C

撃墜数：H > 17 P > 36

現在地：三重県四日市市

- - - - -

美都は必要な情報を手際よくAPから探し出す。

やや不機嫌そうな顔をしながら美月に情報を伝える。

「美月いゝあの3人組さあ？」

「生きてた??」

「ううん…2人死んでるよ」

「え〜1人だけ生きてるの？」

「たぶん美月を宙吊りにしたやつだよ〜生きてるの」

「まじか！私アイツがむかつてたんだ！」

「行く？」

「当たり前じゃん！」

美都は少し困った顔でつぶやく。

「遠いよ？」

「どこにいるのかわかるの？」

「三重だって……」

「え！？三重ってどこだし！」

「ん〜っと……下の方だよ？」

「チャリでいけないの？」

「いけるわけないよ……す〜く遠いから！」

美月は美都の言葉に落胆し、足元に転がっている死体に更に強い蹴りを入れる。

美都も例の3人組はすぐ近くにいると思っていたためかなりがっかりした表情になっている。

「美都？車運転できる？」

「運転はできるけど…みいまだ仮免だよ？」

「仮免あればいけるくない？」

「軽ならいけるかも？」

「軽いいじゃん！私軽好きだし！」

「じゃあ……動く車探しいく？」

「ういつす〜！」

自分らのプライドに傷をつけた男を自分の手で殺さなくてはいけないという衝動に駆られる。

復讐というわけではないが、明らかに2人の表情を見れば殺す気で行く！という事がわかる。

目は笑っているのだが、光はなく冷たい表情で冷徹な笑みを浮かべている。

「白刃さあ？」

「うん？」

「なんか違う人がもってるっばいよ？」

「どんな人なの？」

「スキルもってる女っばいよ？」

「返してもらいにいこ？場所は？」

「三重だよ」

「え！これって一石なんとかじゃない？」

「一石二鳥って言うんだよ〜美月い〜」

「それそれ！」

目的の「物」が向かう先にあると知った2人は万遍の笑みを浮かべながら、移動手段である車を探し始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5649o/>

Real Game 第1章 ~ 修一編 ~

2011年9月29日12時11分発行